

姫様は
死神の
夢を観る



BLAZBLUE Fanbook 2011 * Ragna x Rachel

R-18





ぎゃあ

な

何!?

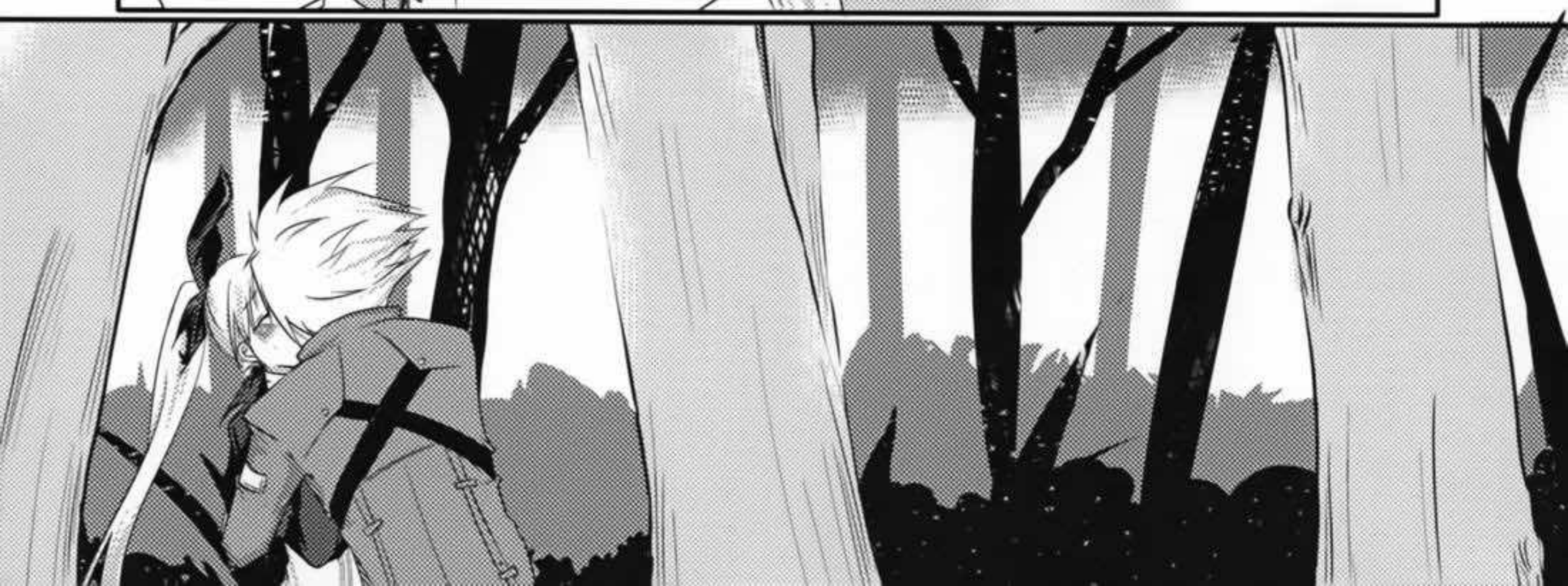
もうここ

バカにでも
したいのかしら?
随分と、
ラグナ

わかってっから
もう
しゃべんな

なによ

ラグナの
くせに...







優しい下僕に
ご褒美よ

入れさせて
あげるわ



仕方が
ないわね



酷くやられた
みたいだしな

今日だけだ
調子にのんな



ウサギの体
なんて興味
ねえっての

何言っ
てんだよ
馬鹿か



痛かったら
すぐ言えよ

……
しよーがねえな



いいから
はやくなさい
愚図ね



硬くしているくせに
随分と強情ね

私に恥を
かかせる気?

……っつーか
おまえさつぎ
テル

ぎゃっ





こんにちは、こんなところに失礼します、霧月悠衣と申します。
本を手にとっていただきありがとうございます！
ブレイブルー本5冊目になります……が、初の姫様本ということで
いつものハザツバとは勝手に違ってやや戸惑っておりました(笑)
姫様は可愛くて大好きなのですがなかなか描く機会もなく
今回思う存分描けたのでとても楽しいです(*^▽^)
ゲーム内で一番可愛い姫様ってアナタの中ではどれでしょうか？
私は断然対戦中の姫様ですね(ｷｯ)
立ち絵やイベントシーン、露出度高めの特典テレカなどの絵も良いですが
ドット絵の姫様が一番可愛いです……！！
しかしエッチな漫画を描くとなると、マスコット共はなかなか邪魔な存在ですね(酷)

さて、このたびのラグレイ本は合同誌ということで
ここからは8年くらい一緒に作品つくってるSINOさんのラグレイ小説です。
いかに私がレイチェルやラグナのキャラ掘めていないのか
痛感しましたね！^^泣いた。
挿絵をちょこっと描かせて頂きました。
それではどうぞ~♪

しっかりと
見せていただきましたぞ

そういえば
ラグナと会う前に
ヴァルケンハインを
呼んだのを
すっかり忘れていたのだわ

ハメられた
?!

ハメたのは
貴様だろう小僧

うっせーよ
おっさん

おめえ!!



新聞屋さんの遊園地チケット

「一ヶ月でいいから取ってくださいよお」

「当家ではそのようなものは間に合っておりませんので、申し訳ございませんが、お引取り願いますでしょうか？」

一面が手入れされた花で敷き詰められている古城の入り口。

映画や絵画で出てきそうな城の前で、老紳士と紺色の作業服の男。

まったく接点の無さそうな二人が押し問答をしている。

「カグツチ新聞ですよ。カグツチ新聞。経営者の6割が読んでいる（という噂の）カグツチ新聞。知っていますよね」

「申し訳ございませんが、間に合っておりますので、お引取りください」

「知らないんですか？ どうです？ 一ヶ月だけ取ってくれませんか？」

「……………ここまで話が通じない方も珍しい……………」

老紳士が最近の若いものは嘆かわしいと言わんばかりに、深いため息を吐く。

「仕方ありません……………手荒な真似はしたくありませんが……………」

「えっ？ じゃあ取ってくれるんですね」

男が喜びで目を見開く。

「ヴォルフ！」

老紳士が叫ぶと、右腕に青い毛が生え、黒い爪が生え、獣のものに変わる。

「わあああああ！」

男はさらに目を見開き、腰を抜かして地面に尻餅をついた。

「早く……………お引取り願いますでしょうか？」

「あわ……………わわわ」

「お止めなさい。ヴァルケンハイン」

老紳士と男が声のした方に視線を向ける。

細長い綺麗な金髪を二つくりにし、胸の大きな赤いリボン。全体を

黒のドレスで統一されている少女が立っていた。

「姫様に怒られたッス！」

喋る赤いヌイグルミも飛んでいた。

「これは失礼しました。つい頭に血が上ってしまいました……………」

獣の腕を人の腕に戻し、姫様と呼ばれた少女に深々と頭を下げる。

少女は男を冷たい目で見下げた。

「あなた、どうやってここに来れたかはわからないけれど、こんなところまで勧誘に来る勇氣だけは認めてあげるわ」

「認めてやるッス！」

「ギイ、後でお仕置きよ」

「何故ッス！？」

「……………ヌイグ……………飛んで……………て……………じな？」

腰を抜かしている男は少女と老紳士とヌイグルミを交互に見比べる。

「ええ、手品よ。良く出来ているでしょう」

「……………すげえ！ 初めて見た！ こんなもの！」

男は急に立ち上がるとヌイグルミを握ね繰りまわした。

「ぬぎい！ なんすツカ！」

「へえ、良く出来ているなあ！ とても手品とは思えんわ！ さっきの

狼みたいなヤツも手品なんだろ！ すげえなあんたら！ 俺も昔、本気

で新聞屋やるか手品師やるか迷っていたからな！」

そう言いながら、男はヌイグルミから手を離すと、ガサゴソと鞆をあ

さりだした。

「あんたらTVとか舞台とか立ったほうがいいよ！ 絶対売れる！ 俺が

保障するわ！ お前らには勝てそうにないし、俺やっぱり新聞屋やって

良かったわ！」

鞆から紙切れを取り出すと、少女の前に差し出した。少女は勢いに押

されて受け取ってしまう。

紙切れには『シナツ遊園地 特別招待券』と描かれていた。

「これ、遊園地のチケット！ いいもん見せてくれたお礼だ！」

「……………」

「じゃあな！ また手品見せてくれよな！」

男は踵を返すと、走り去っていた。

「……つっこむ隙もなかったわね」

少女はため息を吐くと、貰ったチケットをヒラヒラさせた。

「レイチエル様……それはどうするおつもりですか？」

「……そうね……捨ててもいいのだけれども……使わせてもらおうわ」

「いったいどうするおつもりですか？」

「退屈しのぎには……ちようどいいかしら」

少女はマントを翻すと闇夜に消えていった。

「これで入れると聞いたのだけれども」

レイチエルは受付の上半身が半裸で屈強な男にチケットを見せた。

「オッス！ お二人様ですね！ お受け取りいたします！」

半裸で屈強で素敵な笑顔の男が入門のバーを上げる。

「ようこそ！ シナツ遊園地へ！ こゆっくりお楽しみください！」

無表情で中に入るレイチエルと、ぶっきらぼうな顔をしたラグナが中

に入る。楽しいな親子連れな声と愉快なきぐるみがいる遊園地にはふ

さわしくない。

「聞き分けがいい門番ね。ラグナ」

「おい、ウサギ！ てめえ、どういうつもりだ！」

「ラグナ、あなたは聞き分けが悪いわね」

「人の話を聞け！」

事の始まりは数時間前、馴染みの食堂で食事を取っているラグナにレ

イチエルが急に現れ、

『二人きりで遊園地に行きましょう、ラグナ』

『おいウサギ、おまえ帰れよ。メシの邪魔するな』

『あなたに断る権限はなくてよ。ゲオルグ十三世』

ゲオルグの放電により、気絶したラグナが目を覚ますとシナツ遊園地

の前だった。

ラグナは詰め寄った。

「帰りたければ帰ればいいわ。お金もないあなたは徒歩で一人寂しく第

十一階層土地シナツから、第十三階層土地カグツチまで戻ればいいわ。

無一文のあなたはお腹がすいて途中でのたれ死ぬのよ。哀れで滑稽ね」

レイチエルは侮蔑した態度をラグナに見せる。主導権は自分なのだか

ら、満足するまで付き合えということだ。

「反則だろ！ それ！」

「ちよつと遊んだら帰るわよ。ただの退屈しのぎよ」

「…………わかったよ！ 付き合えばいいんだろ！」

ラグナは頭をかき、観念をする。

「で、どこに行けばいいんだよ」

「ここよ、ここ」

レイチエルはパンフレットの一部分を指差した。

ラグナが覗き込むとそこには『これは怖いぞ！ オバケのいる武家屋

敷！』の文字と一緒に、落ち武者のデフォルメキャラも描かれてある。

「…………ふう」

ラグナは頭を掻きながら、ため息を吐くと、

「馬鹿！ んなどこ行くかよ！」

入り口のほうに向かって駆け出した。

「インピッシュ・シプソファイア」

レイチエルは自分の手元でカボチャを生成すると、風を起こし、発射す

る。

「痛い！」

見事、後頭部に当たり、ラグナは地面に倒れこむ。

「無様ね」

「手加減しろよ！ お前！」

ラグナは頭をさすりながら、レイチエルに詰め寄る。

「あら？ どうして逃げるのかしら？ もしかしてオバケ屋敷が怖いのかしら？」

レイチエルはラグナの顔を見つめると、ニヤニヤとにやけた。誰が見ても、明らかに馬鹿にしている。

「……んなわけねーだろ！ 馬鹿が！」

「じゃあ、行きましょー」

ラグナは一瞬しまったという顔をしたが、

「……いい、いったろーじゃねえかよ！ 馬鹿が！」

膝が震えているラグナは手足が一緒になりながら、歩き出した。

この遊園地に「本物が出るオバケ屋敷」という噂が流れている。

おそらく遊園地の経営者が客足を伸ばすために流したデマだろうが、ラグナはこのオバケ屋敷のことは知っていた。本物が出ることなどありえないだろうが、もしものことがある。

ラグナは一刻も早く、この場から立ち去りたかった。

「うわわわわわん、怖かったよお」

（お、おおっ！ そんなにやべえのかよお！）

出口で泣き叫ぶ子供の声が、ラグナの恐怖心をそそる。

ラグナはもう一度、レイチエルに確認をした。

「ほ、ほんとに入るのか？」

「一人で寂しくのたれじめ方をあなたは選ぶのね。ああ可哀想」

「……………」

冷たく言い放つレイチエルに黙ることしかできない。

「どうしても嫌なら私の言うことを聞きなさい」

「な、なんだよ！ 早く言えよ！」

急な提案にラグナは耳を貸す。

「オバケ屋敷には入らなくていいから、私と観覧車に乗りなさい」

「はあ？」

あまりにも急な提案に素っ頓狂な声を上げる。

「観覧車とオバケ屋敷。好きな方を選んで——」

「観覧車乗るぞー！ ウサギ！」

ラグナはレイチエルが言い終わる前に、口を挟んだ。

「ほら、さっさいくぞー！ 観覧車！」

オバケ屋敷に入るくらいなら、逆立ちしてガグツチ一周をしてもいいくらいだと思っている。彼は必死だった。

「あつ！ 待ちなさい。ラグナ！」

ラグナはレイチエルを置いて、観覧車の見える方向へ歩き出した。

「結構混んでんな……ウサギ」

「ほかに行くところがないのかしらね」

観覧車の列に並ぶ二人。周りはカップルや親子連れで一杯。

（俺ら……結構場違いなんじゃねーの？）

ラグナがそんなことを思っていると、自分たちの番になる。

「お二人様どうぞ」

やる気がまったく感じられないバイトからゴンドラに誘導され、二人はゴンドラに乗った。ガチャンと扉が閉まる。

レイチエルは優雅にため息を吐くと、

「あういうのは私の下僕に相応しくないわね」

まったく優雅ではない言葉を口にする。

「人に会うたびにそういう見極めすんじゃねーよ！」

「そうね。私の下僕はナゴとギイ、それにあなたで十分ね」

「俺をさらっと入れんじゃねーよ！」

「キャンキャンキャンキャンキャンうるさいわね。弱い犬ほどよく吠えるというけれども」

「だれが犬だ！」

「少し黙っていてくれないかしら？ 景色を楽しみたいのだけれども」

「おめーがちよっかい出してんだろーが！」

傍から見れば異端な会話だろうが、二人にとっては日常の会話。

レイチエルはラグナの喧騒を軽く無視をし、外の景色を楽しんでいる。

「たまにはこういう景色もいいものね」

ラグナに顔を向けて、優しく微笑み、また窓の方へ顔を向けた。

柔らかな日差しが観覧車の窓から差し込み、レイチエルの綺麗なプロ

ンドがキラキラと宝石のように輝く。

(……喋んなきや綺麗なんだけどな)

レイチエルがしばらく景色を楽しんでいると思えば、急にラグナのほうを向いた。

「どーした？ ウサギ？」

「ねえ、ラグナ。そろそろ観覧車のおつぺんね」

「ん？ あーそういえば、そうだな」

「……………」

レイチエルは突然神妙な顔をして、黙りだす。

「どうしたんだよ？ ウサギ」

「私としたことが……失策だったわ……」

「ウサギ？ どうした？」

「ラグナ、よく聞きなさい。観覧車に男女で乗ってしまった以上、私達はキスをしなければ降りられないの！」

「はあああん？」

真顔で意味不明なことを言い出すレイチエル。

「弱犬とは言え……男と二人で乗ってしまった以上、この掟に従うしかないわけ」

「……お前、マジで言ってるのか？」

「そうしないといけないのでしょうか？ 降りられないよりマシなのだから」

レイチエルはラグナを真剣な顔で見つめた。嘘を言っている気配はまるで無い。

「はははは」

レイチエルがそのようなことを真剣に言っているのを聞き、ラグナはケタケタと笑い出した。

「何がおかしいの？」

「あー、いや、なんでもねーよ」

もちろんラグナはキスなどしなくても良いことは知っている。(そんなことねーって教えてもいいけどな)

本当のことを教えようと思ったが、やめた。

頂上に向かう度に、頬が赤く染まり、モジモジする。仕方ない仕方ないといと小声で呟く。さっきまでの横暴で無茶苦茶でワールドイズマイナーな態度はまるで無い。

そんな彼女がたまらなく可愛い。

ラグナはレイチエルの横に座りだす。ピクツとレイチエルの体が震える。

「あー、もう頂上だけだ」

「わ……わかってるわよ……」

レイチエルは覚悟を決めたのか、ギョッと目を閉じて、ラグナのほうを向いた。

目を閉じ、口をこわばらせ、小動物のようにプルプルと震えている。

ラグナは頭をくちやくちやくに撫でてしまいそうなる程、可愛いと感じた。

「じゃ、行くぞ……」

レイチエルは小さく頷くと息を止めた。

ラグナはレイチエルに口付けをした。レイチエルの唇は柔らかく、お菓子のように甘い匂いと味がした。肩が震えたレイチエルの鼻息がラグナの顔にあたる。くすぐったくて、心地よい。

ラグナはレイチエルから顔を離すと、頭を照れくさそうに頭を掻いた。

「あー、こんなもんでいかがでしょうか？ レイチエルお嬢様」

ラグナは頬を掻きながら、照れ隠しの言葉を放った。

「ふっ……ふんっ！ ま、まあ悪くなかったかしら」

レイチエルは自分の唇に手を当て、頬を赤く染める。

「……仕方ないわ。弱犬に噛まれたとでも思うしかないのだから」

レイチエルはラグナから視線を逸らすと、再び景色のほうを向き、足をパタパタとさせた。

ラグナからはレイチエルがどんな顔をしているのかわからない。

観覧車には若干気まずい沈黙が流れる。

そもそも何故レイチエルがラグナを遊園地に誘ったのかはラグナはいまいちわからなかった。遊園地に来ただけなのなら、ナゴやギイ



達もいるだろうし、二人なら喜んで来そうだ。しかし、レイチエルはわざわざ二人を置いて、ラグナと一緒に遊園地に来ている。

はじめは遊園地で一緒にオバケ屋敷に入って、心行くまで自分をバカにすることが目的だと、ラグナは思っていたが、それも違うらしい。

「ふん、ふん♪」

レイチエルは澄んだ声で楽しそうに鼻歌を歌っている。

この様子を見る限り、レイチエルは嫌がってはいなく、むしろ喜んでいようにも見える。

もしかして、レイチエルは自分のことが好きで、遊びたいのではないのかと、疑ってしまう。

吸血鬼は人を好きになったりするのだろうか？

(まあ、俺はウサギのこと……)

ラグナが変な逆推をしていると、急に鼻歌がやんだ。

「ね、ねえラ、ラグナ……」

「な、なんだよ！」

しばらく景色を楽しんでいたかと思ったレイチエルが、再びラグナの方を向いた。

ラグナは自分の心が見透かされたと思い、ドキツとする。

「……ラ、ララグナ……も、もう一回だけキ——」

レイチエルが何かを言いかけた時、観覧車のドアがガチャッと開いた。

「ありがと——」ざいやしたー、足元お気をつけくださいー」

やる気のないバイトが抑揚のない声で二人に降りることを促した。

レイチエルはバイトをキツと睨みつけた。

「やはり、あなたは私の下僕には相応しくないわ」

「は、はあ？」

急な言葉にバイトはクビを傾げることしかできなかった。

観覧車を降り、二人は目的も特になく歩きます。

「あー、こっから先はどうするよ」

ラグナはそっぽを向いて、レイチエルに話しかける。照れくさくて、ま

もに顔を見れない。

「そ、そうね……そろそろ……帰ろうかしら」

「そつ、そうか」

嫌々来たが、今となっては彼女と別れるのが名残惜しい。

「ラグナ、手を出しなさい」

レイチエルは手を差し出し、ラグナは彼女の手を握る。

柔らかな傷一つついていない彼女の温かな手がラグナを包んだ。

「なかなか従順的じゃない。関心するわ」

「うるせーよ」

「こ褒美として、ヴァルケンハインの入れたお茶とミルクレープぐらいは出してあげるわ」

「あーやめておくわ」

レイチエルとキスをしたことがヴァルケンハインにバレたりでもしたら命がいくつあっても足りない。無表情で殺されそうだ。

「今度は反抗的ね。主人の言うことには従っておくものよ」

「だから、俺はお前の奴隷じゃねーっつーの」

今度は自分がレイチエルを誘ってやろう。

お茶とお菓子が好きだから、カグツチにある喫茶店でも入ろうか。

紅茶の入れ方がなっていないとかガタガタ言いそうだから、

(やめておくか)

「あら？ なにを考えているのかしら？」

「なんでもねーよ」

「まあ、いいわ。また遊んであげるわよ、ラグナ」

「今度は俺が遊んでやるよ」

レイチエルはラグナの意外な言葉に驚くが、すぐに冷静さを取り戻し、

「ふふっ……お馬鹿さん。まあ、楽しみにしてあげるわ」

レイチエルはラグナの手をギュッと握りしめるとマントを翻した。

姫様は 死神の 夢を観る

発行日 2012/08/12
サークル 水魔-swimmer-
PN 霧月悠衣(ムツキユイ)&SINO
サイト <http://applepie.gozaru.jp/>
印刷所 ねこのしっぽ様(お世話になってます)
pixiv 190241
twitter applepie_yui ←霧月悠衣

BlazBlue中心にサイト運営中
気軽に遊びに来て下さいね♪

ふふ
ラグナ
私が逮捕してあげるわ

後書きも変なところに失礼します。
小説、漫画いかがでしたでしょうか。
本が出来上がるにつれ姫様愛が増してきました。
また何かあったら作ってみたいですな!
次はテルミとレイチェルで酷い本とかも挑戦したい。
余談ですが、原稿を見せたとき
SINOさんに「え!?エロなの!?!」って言われて
申し訳ない気持ちになりました。
すいません、同人誌っていったら
エロい原稿しか思いつけない残念な頭で!(笑)
ほのぼのニヤニヤする小説の横に
エロスなものをぶち込んだ事、反省はしている。
次回もおそらくブレイブルー本だと思います!
また、ネットやイベント、本などでお会いしましょう。
ありがとうございました♪

2012/08 霧月悠衣&SINO

胸のサイズが
あまり変わらない
だ……と!?



BLAZBLUE Fanbook 2012 summer
Ragna=The=Bloodedge×Rachel=Alucard
For adult only

(C)Swimmer
SINO&Mutsuki Yui
<http://applepie.gozaru.jp/>

